愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討¹

——中高年期夫婦を対象に——

伊藤 裕子 文京学院大学 相良 順子 聖徳大学

Reliability and validity of marital love scale in middle-aged and elderly couples

Yuko Ito (Bunkyo Gakuin University) and Junko Sagara (Seitoku University)

A marital love scale was created to study the marital quality of middle-aged and elderly couples, and the scale's reliability and validity were examined. In this study, 888 middle-aged and elderly married participants completed the marital love scale questionnaire as well as answering questions regarding marriage satisfaction and husband-wife communication. In all age groups, men scored higher than women on the marital love scale. The marital love score gradually increased from the middle-aged to the senior period, and like the marriage satisfaction score, the marital love score showed a U-shaped curve in the whole married life. The results also showed that the scale was highly correlated with marriage satisfaction and spousal self-disclosure. Thus, the validity and internal consistency of the marital love scale were confirmed.

Key words: marital love scale, scale reliability and validity, marital quality, middle-aged and elderly couples.

The Japanese Journal of Psychology

2012, Vol. 83, No. 3, pp. 211-216

近年、少子化、長寿化によって、子育てを終えた夫婦が二人で過ごす期間が長期化している。一方、離婚率は上昇を続け、特に結婚 20 年以上の熟年離婚が占める割合はこの四半世紀で 3 倍に増加した（厚生労働省, 2010）。そのため、これまで親子関係中心に営まれてきた日本の家族において、中年期以降の夫婦のあり方がますます重要になってくる。

しかし、わが国の心理学分野で夫婦関係に関する実証的な研究が本格的に行われるようになったのは、柏木・平山（2003）も指摘するように、ようやく 1990 年代に入ってからである。夫婦関係に関する研究はアメリカにおいて歴史が長く、家族社会学および家族臨床の分野で発展してきた。夫婦関係を評価する場合、結婚の質（marital quality）を測る尺度として、古くは Lock & Wallace（1959）の Short Marital Adjustment Test（以下 MAT とする）や、MAT を踏襲しながら改編を加えた Spanier（1976）の Dyadic Adjustment Scale（以下 DAS とする）がある。そもそも結

婚の質とは、“夫婦関係におけるさまざまな次元についての主観的な評価”（Spanier & Lewis, 1980）と定義され、結婚生活のさまざまな側面における意見の一致や共同活動の頻度といった個別の側面から、結婚による幸福、結婚の成功、結婚満足度などの総合評価を含めた、これまでの研究で取り上げられてきた夫婦関係に関する諸概念を総花的に盛り込んだ包括概念なのだという（菅原・詫摩, 1997）。

しかし、これらの尺度の問題点として、第 1 に、尺度はさまざまな側面での夫婦間の一致の程度や、何かを一緒に行う頻度など、明らかに異質な次元から構成されており、一次元性が保証されていないにもかかわらず、総合得点を夫婦関係の良好さの指標とするなど尺度構成上の問題がある。第 2 に、項目によって得点の与え方が異なり（例えば“一致”の場合、ある項目は 5 点、別の項目は 15 点というように）、外的な基準の根拠なく項目に重み付けがされるというスコアリングの問題が指摘されてきた（Fincham & Bradbury, 1987）。さらに別の観点から、多くの研究で採用されている自己報告による査定の信頼性の問題を指摘する研究もある（Fincham & Beach, 2006）。そのため、これらの問題に検討を加え、夫婦関係の良好さに絞った Norton（1983）の Quality Marriage Index（以下 QMI とする）、あるいは夫婦関係の一側面を構成する夫婦

Correspondence concerning this article should be sent to: Yuko Ito, Faculty of Humanities, Bunkyo Gakuin University, Kamekubo, Fujimino 356-8533, Japan (e-mail: yukoito@bgu.ac.jp)

¹ 本研究は、文京学院大学総合研究所の助成（平成 20 年度）により行われた。研究の一部は、日本心理学会第 75 回大会（2011 年）において発表された。

間のコミュニケーション・パターンを評定する尺度 (Communication Patterns Questionnaire: 以下 CPQ とする; Christensen & Sherk, 1991) など, さまざまな尺度が開発されてきた。また, カップルセラピーの立場からは, Gottman & Silver (1999 松浦訳 2007) による夫婦間の問題の現状をさまざまな角度から査定する質問が提案されている。いずれにしる結婚に対する総合評価 (結婚満足度, 結婚幸福度など) と, その総合評価を規定する説明変数となる夫婦関係の諸側面 (意見の一致, 共同活動, コミュニケーション, 愛情関係など) を分離した上でそれらを測定する尺度を開発する必要があるだろう。

先述したように, わが国の夫婦関係に関する実証的な研究の歴史は浅い。夫婦関係を評価する場合, 総合評価として, 結婚満足度や夫婦関係満足度を単項目で測定するほか, 諸井 (1996) の夫婦関係満足尺度がある。他方, 夫婦関係を構成する一側面としての愛情には, 菅原・詫摩 (1997) の夫婦の愛情尺度が用いられてきた。菅原・詫摩 (1997) の尺度は, Lee (1977) の LETS-2 と Rubin (1970) の Love Scale を基本として, “空気性” と名付けられた項目を加え尺度構成したが, 結果として空気性は尺度にのらず, 恋愛感情を示す内容が多くを占める。項目数も手ごろであり, 信頼性・妥当性ともに高いが, 恋愛尺度を元にしていないため, “本当に愛していることを実感する” “お互いに出会うためにこの世に生まれてきた” “恋人同士のよう気がする” など情熱的な愛情を表す内容が多く含まれている。そのため, 尺度得点は中年期以降 (結婚 15 年以上) の特に女性で低下が著しい。他方, 諸井 (1996) の尺度は, Norton (1983) の QMI の 6 項目を翻訳したもので, こちらは夫婦関係の総合評価尺度である。

夫婦関係を総合的にとらえるのではなく, 個々の側面に焦点を当てて評価する場合, さまざまな指標があるが, 近年注目されているのが配偶者からの情緒的サポートである (Cutrona, 1996)。わが国でも, 子育て期の母親の育児不安や精神的健康に, 夫からの情緒的サポートは欠かせないものと考えられる。また, 長年連れ添った夫婦では, 恋愛期や結婚当初での情熱的な愛情よりむしろ, 相互の信頼や思いやり, 理解と尊敬が関係性の基盤としてなくてはならないものである。そして関係性の基盤には, 結婚生活の継続の質をとらえるコミットメントの概念も重要である (Adams & Jones, 1997)。

わが国の研究において夫婦関係を総合的に評価する場合, 先の MAT (Lock & Wallace, 1959) や DAS (Spanier, 1976) が今日でも使われており, 一方, 夫婦関係を構成する一側面として, 愛情関係に特化したものでは菅原・詫摩 (1997) の愛情尺度が用いられている。しかし, 前二者は尺度構成上の問題があり, 後

者は少なくとも中年期以降の夫婦には適さないと考える。そこで本研究では, 夫婦関係を情緒面からとらえる測度として, 中年期以降の夫婦を対象に愛情尺度の作成を試み, その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。ここでいう愛情とは, 夫婦の情緒的な関係を指し, 愛情と信頼を基盤として, 相互に思いやりや関心を振り向けているか, すなわち, 自分が信頼され, 理解され, 支えられていると思えると同時に, 相手を理解し, 尊敬し, 相手のために助力することをいう。

方 法

調査対象と方法

調査対象は中高年期の夫婦で, 大学生の親, 大学主催の生涯学習講座および地域貢献講座の受講者, 趣味のサークル等の参加者に調査票 (夫婦票) を配布した (1020 組)。大学生の親は, 学生が自宅外の場合は郵送で, 自宅通学の場合, 学生を通じて配布・回収した。それ以外では回収はすべて郵送法によった (回収率 44.8%)。夫婦間の回答の独立性を保つため, 回答後すぐ封ができるシール付きで, 切手を貼った別々の封筒に調査用紙を入れ, 妻票・夫票で用紙の色を違い, 2 通 1 組として配布した。なお, 配偶者がいない場合は, 本人のみの回答でよいことを記した。

倫理的配慮として, 調査への協力は任意であり, 回答したくない項目には回答しなくてよいこと, 全ての回答は統計的に処理されるので, 個人の回答が特定されることはないことを依頼状に明記した。

有効票は女性 477 名, 男性 437 名, 計 914 名で, 調査は 2008 年 7—12 月に実施された。

対象者の属性

年齢は 40—70 代で 99.2% を占め, 平均年齢は女性 55.9 歳 ($SD9.4$), 男性 58.9 歳 ($SD9.8$), 平均結婚年数は 29.5 年 ($SD9.8$) だった。有配偶者のうち配偶者と同居している者が 95.1%, 別居 1.1%, 単身赴任 1.0%, 離死別状況は, 死別 1.9%, 離別 0.7%, 独身 0.2% だった²。男性では, 定年を迎えた者が 39.1% あり, 定年前 46.0%, 定年制度がない・関係ないが 14.0% だった。就業形態は, 男性で最も多いのは常用雇用の 42.3%, 次いで無職 23.3%, 経営者・役員 12.4%, 自営・自由業者 10.8% で, 女性で最も多いのは専業主婦の 43.2%, 次いでパート・アルバイト 29.1%, 常用雇用 13.2% だった。なお, 本研究の分析対象者

² 対象者が中高年期であるにもかかわらず離死別者が少ないのは, 依頼状に“夫婦関係の調査”と記されていたため, 配偶者のいない者が該当しないと考えて回答しなかったためと考えられる。

は有配偶者（888名）のみとした。

分析の測度

測度は大別して、中高年期における夫婦の情緒関係を評価する愛情尺度と妥当性検討のための測度である。妥当性検討のために、まず、夫婦関係を総合的に評価する測度として夫婦関係満足度、離婚願望を、夫婦関係を個別の側面から評価するものとして夫婦の会話時間、配偶者への自己開示、夫婦の共同行動を取り上げた。

夫婦の愛情尺度 Fincham & Beach (2006) は、夫婦関係に関する研究は文化が異なればそのままでは適用しにくいという。そこで、夫婦関係に関する菅原・詫摩 (1997) の親密性、川浦・池田・伊藤・本田 (1996) の情緒的サポート、平山・柏木 (2001) のコミュニケーション、宇都宮 (2005) のコミットメント各尺度を参考に、情緒的側面において自己および配偶者からの配慮、関心、理解、尊敬、サポートを受けているあるいは行っているという内容からなる17項目を独自に作成した。評定は“4. いつもそうだ”“3. たいていそうだ”“2. たいていそうではない”“1. いつもそうではない”の4件法である。

夫婦関係満足度 結婚・夫婦関係に対する総合的な評価として、単一指標による夫婦関係満足度を尋ねた（“ご夫婦の関係について、現在の満足度を10点満点で評価して下さい”）。回答は“10. たいへん満足している”から“1. 全く満足していない”の間の当てはまる数字に○をつけるものである。評定を10段階としたのは、単一指標のため測定の精度を高めるためである。

離婚願望 離婚をめぐる状況は、男性と女性で背景が異なるため質問および回答内容は異なっている。男性では、“あなたは配偶者との離婚について考えたことがありますか”で、評定は“1. 離婚など考えたことはない”“2. 過去に考えたことはあるが、今はない”“3. 現在でもそういう選択肢はあり得る”“4. 考えており、できれば離婚したい”の4件法、女性では、“結婚生活について、もし経済的に可能なら‘離婚したい’と思いますか”という問いで、“1. 全く思わない”“2. あまり思わない”“3. そういう選択肢もあり得る”“4. 近い将来したい”“5. 今すぐにでもしたい”の5件法である。

会話時間 夫婦の1日のおよその会話時間を5件法で尋ねた。“1. ほとんどない”“2. 1日30分以下”“3. 1日30分—1時間くらい”“4. 1日1—2時間くらい”“5. 1日2時間以上”である。

配偶者への自己開示 会話時間が夫婦間コミュニケーションの物理的側面だとしたら、配偶者への自己開示はその心理的側面といえよう。伊藤・相良・池田 (2007) を参考に、子育てを終えた中年期から高齢期

の夫婦が話題にする内容“最近嬉しかったこと、楽しかったこと”“腹が立ったり、疑問に思ったこと”“自分の趣味や活動にかかわること”“互いの健康”“家計のこと”“家族のこと”の6項目より構成され、普段、配偶者に話したり相談したりすることがどの程度あるかを、“4. よく話す”“3. 時々話す”“2. 話したことがある”“1. まず話さない”の4件法で回答を求めた。伊藤・下仲・相良 (2009) における α 係数は.88で、内的整合性は十分高い。

夫婦の共同行動 “買い物”“外食”“旅行”“趣味・活動”の4項目について、二人で一緒にすることがどの程度あるかを尋ねた。評定は、“4. よくある”“3. 時々ある”“2. たまにある”“1. ほとんどない”の4件法である。伊藤他 (2009) における α 係数は.79で、満足できる値といえる。

結 果

尺度構成

夫婦の愛情尺度について、項目の平均値とSDから分布を検討したところ、不適切な項目はみられなかった。次に、17項目に対して主成分分析を行った結果、“誕生日や結婚記念日には、配偶者はプレゼントやお祝いをしてくれる”の主成分負荷量が低かったのを除き、再度分析を行った。その結果、Table 1に示されるように、第1主成分に高い負荷量をもつ1次元の尺度となり、 α 係数も.94で高い内的整合性が得られ、尺度の信頼性が確認された。

なお、各項目について男女で比較したところ、Table 1に示されるように、差のない3項目以外、有意差のみられた項目はすべて女性より男性の方が高かった。

妥当性の検討

妥当性は、各測度との相関関係から検討を行った。得点は、単項目の測度を除き、尺度に含まれる項目の単純加算値を用いた。結果は、Table 2に示される通りである。

まず、夫婦関係を総合的に評価する測度としての夫婦関係満足度および離婚願望について検討を行った。夫婦間の愛情や親密性は高い夫婦関係満足度をもたらし、また、それらが実現できない場合、離婚願望が強まると考えられる。Table 2より、いずれも非常に高い相関が得られ、特に女性で高かった。次に、夫婦関係の個別の側面としての夫婦の会話時間、配偶者への自己開示、夫婦の共同行動について検討を行った。いずれの測度も夫婦の相互性をみるもので、これらが実現されることで夫婦の愛情や親密性が高まり、逆に、愛情や親密性が高ければこれらも増大すると考えられる。Table 2より、中程度から高い相関が得られた

Table 1
夫婦の愛情尺度の主成分分析結果, 各項目の男女別平均値と SD および t 検定結果

項目内容	第 1 主成分	男性	女性	t 値
・悩み事や相談があるとき, 配偶者は親身になって一緒に考えてくれる	.84	3.05(0.71)	2.84(0.89)	3.75***
・配偶者は私を理解してくれる	.84	2.97(0.64)	2.83(0.82)	2.98**
・配偶者といくと安心していられる	.83	3.26(0.68)	3.00(0.87)	5.20***
・元気がないとき, 配偶者はそれとなく気づかってくれる	.83	3.04(0.71)	2.69(0.87)	6.61***
・物事がうまくいかないとき, 配偶者はアドバイスをくれたり, 見守ってくれる	.82	2.93(0.69)	2.84(0.84)	1.66 [†]
・嫌なことがあったり落ち込んでいるとき, 配偶者は温かく励ましてくれる	.82	2.97(0.71)	2.72(0.84)	4.65***
・配偶者は私の体調や健康を気づかってくれる	.80	3.29(0.69)	2.89(0.84)	7.76***
・配偶者は言葉に出さなくても私の気持ちを察してくれる	.79	2.83(0.71)	2.50(0.80)	6.34***
・私は配偶者の気持ちをできるだけわかろうと努める	.76	3.13(0.61)	2.89(0.76)	5.19***
・配偶者のためならできるだけのことをしてあげたい	.75	3.31(0.59)	3.03(0.70)	6.31***
・私は配偶者を一人の人間として尊敬している	.75	3.28(0.66)	3.02(0.84)	5.01***
・その日の出来事や嬉しかったことは真っ先に配偶者に話す	.73	2.92(0.76)	2.84(0.93)	<i>ns</i>
・配偶者はどんなときでも私の味方でいてくれる	.71	2.95(0.68)	2.84(0.76)	2.21*
・自分は配偶者から信頼されている	.70	2.99(0.72)	3.02(0.73)	<i>ns</i>
・私が不満をぶつけても, 配偶者は黙って聞いてくれる	.66	2.67(0.75)	2.72(0.87)	<i>ns</i>
・配偶者がもしいなくなったら, 私は途方に暮れるだろう	.63	2.95(0.86)	2.75(0.91)	3.45***
主成分の二乗和	9.45			
寄与率 (%)	59.01			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

Table 2
愛情尺度と他の変数との相関係数

	男性	女性
関係満足度	.64***	.78***
離婚願望	-.51***	-.66***
会話時間	.34***	.51***
自己開示	.53***	.72***
共同行動	.40***	.52***

*** $p < .001$

が, 夫婦のコミュニケーションのうち, 物理的な会話時間より心理的側面としての自己開示の方が関連が強い。また, 具体的な行動である夫婦の共同行動とも比較的高い相関がみられた。これらの測度でもやはり女性の方が関連は強かった。以上から, 本尺度の妥当性は確認された。

世代と性による比較

中年期から高齢期にかけて, 夫婦の愛情がどのように変化するか検討を行った。本研究では, 40—70 代に対象者の 99%が含まれるので, それ以外の世代を除き, 世代 (4) × 性 (2) で 2 要因の分散分析を行った。その結果, 性 ($F(1, 838) = 12.51, p < .001$) およ

び世代 ($F(3, 838) = 2.91, p < .05$) の主効果とも有意で, 交互作用はみられなかった。世代について Tukey 法による多重比較を行ったところ, 40 代と 70 代の間で 5%水準で有意な差がみられた。

Figure 1 に示されるように, 男女とも 40 代を底として緩やかに上昇し, 高齢期に入る 70 代で最も高くなる。性差は, Table 1 の各項目で有意差が示された

Figure 1. 愛情尺度得点の性と世代による変化

ものは全て男性が高かったが、全ての世代において女性より男性が高かった。

考 察

本研究は、結婚生活を長く経た中年期から高齢期の夫婦を対象に、夫婦関係の一側面である愛情関係を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を試みた。その結果、高い内的一貫性と妥当性が確認された。

性差 性差については、有意差のみられた全ての項目(13/16)で、また尺度ではどの世代においても女性より男性の方が高かった。項目でみても、菅原・詫摩(1997)の尺度を用いた小田切・菅原・北村・菅原・小泉・八木下(2003)で、1項目を除く全ての項目でやはり男性の方が高かった。同様の結果は、結婚満足度や情緒的サポートでも得られており(稲葉, 2004)、これは夫の方が妻からより多くのサポートを受領しているというサポートギャップ仮説(Belle, 1982)により説明できるだろう。

妥当性 本尺度は、夫婦関係に対する総合評価としての関係満足度と非常に高い関連が示された。すなわち、強固な関係性に基づいた愛情は高い関係満足度をもたらし、反対にその欠如は、関係の破綻を意味する離婚への願望を強めると考えられる。一方、夫婦関係の個別の側面としての夫婦のコミュニケーションについて、その満足は他の領域に比べ結婚満足度の重要な予測因であるといわれる(Jacobson & Moore, 1981)。本研究でも、会話時間、自己開示とも高い関連が示されたが、特に自己開示との関連は非常に強かった。自分が理解され、支えられていると思えること、すなわち、配偶者からの愛情を感じることが高い自己開示を生むが、特に男性では、自己開示できる数少ないネットワーク中の配偶者(稲葉, 2004)に自己開示する(できる)ことが精神的健康に結びつくといわれている(伊藤, 2008)。自己開示は女性にとっては結婚満足度の、男性にとってはそれと同時に精神的健康の源泉だといえよう³。

以上より、本尺度は、中高年期夫婦の情緒的関係を評価する愛情尺度として高い妥当性をもつと考えられる。

世代差 本研究では、中年期以降の夫婦を対象に、横断的ではあるが夫婦の愛情の世代間比較を行った。その結果、40代を底として緩やかに上昇し、特に70代に入って高くなった。これは40代を底とする緩やかなU字型を示す結婚満足度(稲葉, 2004)と、少なくとも中高年期においてはほぼ同様の変化を示す結果だった。それは多くの男性が退職期を迎える60代を境に、夫婦の会話時間や共同行動、夫の家事参加が増大するという事実(伊藤他, 2009)と軌を一にするものである。女性において、中年期以降に著しく低下する菅原・詫摩(1997)の愛情尺度は、測定された項目内容が恋愛尺度を元に作成されたからだと考えられる。

今後の課題 本研究では、中高年期を対象に夫婦の愛情尺度の作成を試みたが、夫のサポートが多く求められる子育て期で、本尺度が他の変数とどのような関係にあるかを検討すること、また、夫婦の相互性が実際に実現されているかどうかについては夫婦ペアでの分析が必要になってくるだろう。

引用文献

- Adams, J. M., & Jones, W. H. (1997). The conceptualization of marital commitment: An integrative analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1177-1196.
- Belle, D. (1982). The stress of caring: Women as providers of social support. In L. Goldberger & S. Breznitz (Eds.), *Handbook of stress*. New York: The Free Press. pp. 496-505.
- Christensen, A., & Shenk, J. L. (1991). Communication, conflict, and psychological distance in non-distressed, clinic, and divorcing couples. *Journal of Clinical and Consulting Psychology*, 59, 458-463.
- Cutrona, C. E. (1996). *Social support in couples*. Los Angeles: Sage.
- Fincham, F. D., & Beach, S. R. H. (2006). Relationship satisfaction. In A. L. Vangelisti & D. Perlman (Eds.), *The Cambridge handbook of personal relationships*. New York: Cambridge University Press. pp. 579-594.
- Fincham, F. D., & Bradbury, T. N. (1987). The assessment of marital quality: A reevaluation. *Journal of Marriage and the Family*, 49, 797-809.
- Gottman, J., & Silver, N. (1999). *The seven principles for making marriage work*. New York: Crown Publishers.
- (ゴットマン, J.・シルバー, N. 松浦 秀明 (訳) (2007). 結婚生活を成功させる七つの原則 第三文明社)
- 平山 順子・柏木 恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度——夫と妻は異なるのか?——*発達心理学研究*, 12, 216-227.
- (Hirayama, J., & Kashiwagi, K. (2001). Attitudes

³ 本研究と同一データを用いた研究によると(伊藤他, 2009)、自己開示の夫婦関係満足度への寄与は、女性 $\beta = .52$ ($p < .001$), 男性 $\beta = .34$ ($p < .001$) であった。一方、自己開示の主観的幸福感への寄与は、女性 $\beta = .12$ ($.05 < p < .10$), 男性 $\beta = .16$ ($p < .01$) で、デモグラフィックな統制変数以外の心理的変数としては、男性における自己開示は主観的幸福感に最も寄与する変数だった。すなわち、自己開示は、女性にとっては夫婦関係満足度に影響し、それを介して主観的幸福感に間接的に影響するのに対して、男性では関係満足度を媒介するルートとは別に、直接主観的幸福感に影響を及ぼしていた。

- of married couples toward communication: Husband/wife comparisons. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **12**, 216-227.)
- 稲葉 昭英 (2004). 夫婦関係の発達的变化 渡辺 秀樹・稲葉 昭英・嶋崎 尚子 (編) 現代家族の構造と変容 東京大学出版会 pp. 261-275. (Inaba, A.)
- 伊藤 裕子 (2008). 夫婦関係における男性 柏木 恵子・高橋 恵子 (編) 日本の男性の心理学——もう一つのジェンダー問題—— 有斐閣 pp. 97-119. (Ito, Y.)
- 伊藤 裕子・相良 順子・池田 政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響——自己開示を中心に—— 文京学院大学人間学部研究紀要, **9**, 1-15. (Ito, Y., Sagara, J., & Ikeda, M. (2007). The influence of husband-and-wife communication on marital satisfaction. *Journal of the Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University*, **9**, 1-15.)
- 伊藤 裕子・下仲 順子・相良 順子 (2009). 中高年期における夫婦の関係と心理的健康——世代比較を中心に—— 文京学院大学総合研究所紀要, **10**, 191-204. (Ito, Y., Shimonaka, Y., & Sagara, J. (2009). Marital relation and psychological well-being in middle-aged and elderly couples. *Journal of Research Institute of Bunkyo Gakuin University*, **10**, 191-204.)
- Jacobson, N. S., & Moore, D. (1981). Spouses as observers of events in their relationship. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **49**, 269-277.
- 柏木 恵子・平山 順子 (2003). 夫婦関係 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 Vol. 42 金子書房 pp. 85-117. (Kashiwagi, K., & Hirayama, J.)
- 川浦 康至・池田 政子・伊藤 裕子・本田 時雄 (1996). 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート——女性を中心に—— 心理学研究, **67**, 333-339. (Kawaura, Y., Ikeda, M., Ito, Y., & Honda, T. (1996). Social network and social support for married women and their spouses. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 333-339.)
- 厚生労働省 (2010). 人口動態調査 2011 年 1 月 1 日 <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/suikei10/index.html>> (2011 年 3 月 7 日) (Ministry of Health, Labour and Welfare)
- Lee, J. A. (1977). A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- Lock, H. J., & Wallace, K. M. (1959). Short Marital Adjustment and Prediction Tests: Their reliability and validity. *Marriage and Family Living*, **21**, 251-255.
- 諸井 克英 (1996). 家庭内労働の分担における公平性の知覚 家族心理学研究, **10**, 15-30. (Moroi, K. (1996). Perceptions of equity in the division of household labor. *Japanese Journal of Family Psychology*, **10**, 15-30.)
- Norton, R. (1983). Measuring marital quality: A critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, **45**, 141-151.
- 小田切 紀子・菅原 ますみ・北村 俊則・菅原 健介・小泉 智恵・八木下 暁子 (2003). 夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連——縦断研究の結果から—— 性格心理学研究, **11**, 61-69. (Odagiri, N., Sugawara, M., Kitamura, T., Sugawara, K., Koizumi, T., & Yagishita, A. (2003). Marital love and marital depression: A longitudinal study. *Japanese Journal of Personality*, **11**, 61-69.)
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Spanier, G. B. (1976). Measuring dyadic adjustment: New scales for assessing the quality of marriage and similar dyads. *Journal of Marriage and the Family*, **38**, 15-28.
- Spanier, G. B., & Lewis, R. A. (1980). Marital quality: A review of the seventies. *Journal of Marriage and the Family*, **42**, 825-839.
- 菅原 ますみ・詫摩 紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価——自記入式夫婦関係尺度について—— 精神科診断学, **8**, 155-166. (Sugawara, M., & Takuma, N. (1997). Assessing of marital intimacy: A review of self-rating scales. *Archives of Psychiatric Diagnostics and Clinical Evaluation*, **8**, 155-166.)
- 宇都宮 博 (2005). 結婚生活の質が中高年者のアイデンティティに及ぼす影響——夫婦間のズレと相互性に着目して—— 家族心理学研究, **19**, 47-58. (Utsunomiya, H. (2005). Gender, marital mutuality and identity development in middle-aged and elderly couples. *Japanese Journal of Family Psychology*, **19**, 47-58.)

—— 2011. 5. 4 受稿, 2012. 3. 3 受理 ——